城砦

井上靖

城砦

井上靖

新潮社版

城　砦

〈井上靖小説全集23〉

昭和49年10月20日発行
昭和53年7月5日3刷

定価 1100円

© Yasushi Inoue, 1974,
Printed in Japan.

著者　井上　靖
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　電話・業務部（〇三）二六六一五一一一、編集部（〇三）二六六一五四一一　郵便番号・一六二　振替・東京四一八〇八
印刷所　二光印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

城砦　五

自作解題　四三五

装画 加山又造

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

井上靖 小説全集 第23巻

城　砦

一　章

最近改装されてすっかり豪華な雰囲気を身に着けた大手町の海洋ホテルの正面入口をはいったところに、〃桂正伸君を肴にして酒を飲む会〃という小さい立札が立てられてあった。その立札はエスカレーターの乗り口の傍に置かれてあったので、その酒を飲む会という会の会場は、そのエスカレーターの通じている二階にあるということを示しているものと思われた。参議院の選挙が終って二、三日した頃で、街からは選挙の騒がしさは消えていたが、選挙騒ぎの最中にすっかり夏が居坐ってしまった恰好で、その日はこの年の最初の夏らしい夏のやって来た日であった。ホテルのフロントの時計は六時を示していたが、戸外はまだ明るかった。陽こそなかったが、夕刻と昼間のどちらに近いかと言えば昼間の明るさだった。

六時少し前から、エスカレーターは次々に人々を二階の会場へ運んで行った。若い者は少く、いずれも恰幅のいい中年以上の紳士たちが多かった。この種の集りは会場の入口に受付があるのが普通だったが、そうしたものはなかった。二千円の会費を徴収する場所が設けられてあるだけで、そこに五、六人の青年たちが立っていた。男たちは一人一人そこで会費を収め、その奥の会場へと絨毯の上を、いやにひそやかな足どりで吸い込まれて行った。ひそやかな歩き方をするわけではないが、分厚い絨毯がそこを歩く者の靴音を吸い取ってしまうのだ。

この〃桂正伸君を肴にして酒を飲む会〃のことは各紙の経済欄の片隅に小さく紹介されてあり、それには極く内輪の小人数の集りであるという説明がついていたが、エスカレーターが次々に運んで行く人数は、どうしてそんな小人数の内輪の会というようなものではなかった。会の幹事の方にも、そうしたことで見込み違いというか、手落ちというか、そういうものがあったかも知れない。会場はせいぜい百五十人程詰まるぐらいの広さであったが、定刻の六時を少し廻った頃は、既にそれを遥かに上廻った人数が詰まっていた。パーティ形式の酒宴だから、詰めれば幾らでも詰まるようなものの、なんといっても息苦しかった。銀座

の酒場から女たちが狩り出されていた。和装、洋装とりどりの夜の蝶たちは、人々の間を体を横にして泳ぎ、時々汗のふき出す顔にハンカチを当てていた。白服のボーイたちはいつもより少し銀盆を高目に捧げなければならなかった。いつもなら、銀盆を胸のところに落着けて、体に多少のリズムをつけて、人々の間を器用に擦り抜けて行くのだが、きょうはそれができなかった。その点、若者たちの身のこなしは生彩を欠いて鈍重に見えた。

会場には雑多な職業の人たちの顔が見えた。財界人、実業家、政治家、学者、新聞記者、みんな桂正伸と交遊関係のあった連中で、どこかに一点共通するところのあるのが感じられた。糞真面目で融通の利かぬといった型の人間は少く、大体に於てその反対の型であった。ざっくばらんに物を言い、仕事もするが、また遊ぶのも好きだといった連中で、銀座の酒場にも出没するし、新橋や柳橋の料亭にも、誘われれば決して厭な顔はしないといった連中だった。従って、きょうの参会者たちはお互いに多かれ少かれ顔見知りで、会場にはいると、すぐ気心の知れた連中の姿を捜して、大きな渦の中に、幾つかの小さな渦を作った。ネクタイをきちんと締めている者もいれば、開襟シャツ、スポーツシャツの襟を上着の下から覗かせている者もいた。

会は新聞社の古参の、一応誰にも名を知られている社会評論家の司会で始まったが、会場はなかなかそんなものは受け付けなかった。勝手に仲間同士で談笑していて、どこかで拍手が起ると、お義理にそれに和するといった状態だった。しかし、どの渦でも、一回は桂正伸のことが話題になっていた。

——ばかだよ、あいつは。

とか、

——正伸の奴、やきが廻りやがった！

とか、そんな辛辣な言葉も聞えたが、そういう言い方の中に、どこかに桂正伸に対する愛情というか、友情というか、そうした温かみが感じられぬことはなかった。

——仕事をやめて、釣りばかりやるんだそうだが、全くあいつらしいよ。

——と言って、人間釣りばかりやってはいられまい。釣りをやるもいいさ。しかし、何も仕事をやめなくてもいいだろう。

——そこが桂正伸なんだよ。仕事より釣りの方が面白くなれば、仕事はやめて、釣りに行くよ。朝から晩まで釣りに打ち込むだろう。

——釣りでよかった、女でなくて。

——女はだめだろう。もう六十近いんじゃないか。若く見えるが。

——女の方が夢中になっても、あいつ、受け付けんよ。あいつには変な魅力がある。だから、本気で気を引いてみようという女もあると思うんだ。しかし、だめだな、正伸は。何ともいえず妙に冷たいところがあるだろう。そこが正伸の魅力なんだが、女は付き合いきれないよ。

一番奥の隅の窓際で、こんな会話が聞えていたが、ここばかりでなく、どこの渦でも、大体こんな種類の言葉が交されていた。

司会者の挨拶のあとに、何人かの人が立った。どこの人も、桂とか正伸とか呼び捨てにするか、多少丁寧なのが、桂君、正伸君と君づけに呼んだ。その中で三、四番目に拡声機の前へ立った証券会社の社長の鬼原の挨拶だけが、持前の声の大きさで、一応会場の隅々まで透った。それまで勝手に自分たちだけで話していた連中も、否応なしに鬼原の挨拶を耳に入れないわけには行かなかった。

——私は正伸君とは高等学校以来の友達で、考えてみると、もう三十数年に亙る交遊になります。ですから、正伸君の気持の動きは、何から何までよく判っているつもりであります。しかし、正伸君が自分が手塩にかけて育て上げたTR工業の社長をあっさり辞め、そればかりでなく、これまで関係していたあらゆる役職から身を引く決心を聞かされた時は、さすがに狐につままれたような気がして、どうしてそんな心境になったか、理解に苦しんだものであります。訊いたが、よく判らない。厭になったから辞めるんだ。俺ももう間もなく六十だ。あと長く生きても十年か、十五年、今まであくせく生きて来たが、あくせく生きるのがばからしくなった。人に気がねばかりして生きて来たが、それが厭になった。これからは我儘をして、自分勝手に生きるんだ。こう言うのであります。正伸君は人に気がねばかりして生きて来たと言うが、私は必ずしもそうは思わない。ずいぶん、人一倍我儘に、勝手気儘に生きて来たと思う。勝手なことをして生きて来たというのでは、ちょっと類がないではないかと思う。

会場では、この時、何カ所からか笑い声が起った。

——その通り。

そんな半畳も聞えた。

——失恋でもなさそうであります。厭世観に依るものでもなさそうであります。どうも、余り深刻な理由ではなさそうなのであります。と言うのは、私に、お前も俺みたいに、会社を辞めろ。お前が重役をやっていたって、どうってことはない。自分が居なくなると、あとが困るだろうなんて気持があったら、それこそお笑い草というものだ。釣りを教えてやるから、俺と一緒に釣りをやろう。魚を釣る楽しさがどういうものか判るだろう。お前も本当に生きる

ということがどういうものか知るだろうし、会社の方は会社の方で、上が一人居なくなって助かる。こう言うのであります。あとで考えてみると、すっかり意見された恰好であります。要するに、桂君のこんどのことは、たいした理由はないと考えていいようであります。生れ付きの我儘な気持が、最も我儘な形に於て現れたのであります。また釣りが厭になって、仕事をやりたい気持が起ったら、彼のことだから、俺をもう一度社長にしろ、そんなことを言うだろうと思います。桂君のこんどのことは、ただただひとえに自分自身を貫いた我儘勝手な行動であります。慰安する必要もないし、激励しなければならぬ理由もありません。しかし、ともかく、たとえ、一時期のことにしろ、桂君が実業界の一線から退いたことだけは紛れもない事実であります。その事実のために、一夕桂君を囲んで飲もうというのが、今夜のこの会の主旨であろうと思います。これは慰安会でもなければ、激励会でも、勿論送別会でもない。桂君を肴にして一杯飲もうという集りであります。肴にしようとしても、うっかりすると肴にされかねないというなかなか手強い相手であります。そろそろこの辺で引込んだ方が無難かと思います。

鬼原のスピーチはこれで終った。桂正伸の高校時代からの友人だと言うだけあって、そこには終始桂正伸の引退を、深刻な意味づけから守った温かい思いやりが感じられた。

桂正伸の引退事件は、いろいろに解釈されていた。それが突然のことであったので、組合との関係が縺れて、その責任をとったのだとか、会社内部の長く続いていた勢力争いの犠牲になったのだとか、より大きい外国資本の某会社への転身が既に約束されており、こんどのことはその下準備であるとか、勝手なことが取り沙汰されていた。一部では桂正伸の政界入りまでがまことしやかに伝えられた。また彼と親交を持っている一部の者の間では、彼は会社勤めがふと厭になったのだ。厭だと思い立つと、無性に矢も盾もなく厭になってしまう、そういう弱さを彼は持っている。こんどのことは、それ以外に格別の意味はなさそうだ。そういう見方も行われていた。どのような見方をされても、いつも最後は、桂らしいとか、正伸らしいとかいう言葉で結ばれていた。いかなる理由であれ、潮時を見はからって、自分から会社を退いたという事実は、誰にも桂正伸らしく思われた。

会場は一層騒がしくなった。鬼原のあとから四、五人がマイクの前に立ったが、もう誰も、その方に耳を傾ける者はなかった。お互いがお互い同士でがやがや喋りまくっていた。ただ一度、ボーイが銀盆を手から滑らせたらしく、器物の割れるけたたましい音が会場に響いたが、その時だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

け、一瞬どの集りも談笑するのをやめて静かになった。

その静けさの中から、挨拶している者の声だけが、深い谷間から上って来る風の音のように、あるひそやかさを以て聞えて来た。こんどある道路建設会社の理事長になった大乃木太平の声であった。大乃木太平の静かな低い調子の声と、その喋り方の抑揚は独特なものだった。すぐ大乃木太平だなと、会場に居る誰にも判った。

――桂君がどんな気持で、仕事から身を退くことになったか、そんなことは私には判らない。私は桂君とは釣り仲間で、釣り天狗の泊る宿屋で顔を合すだけで、釣りの話しかしたことはありません。私もそうですが、桂君はなかなか豪快な釣り師で、生命を張った釣り方をします。体を縄でくくりつけ、大きな波をかぶりながら、魚と、釣るか釣られるかの勝負をします。最近流行のモーター・ボートに乗って、パイプを銜えながら釣りをするといった洒落れたタイプではない。みなさん、御存じの如く、桂君の顔は潮やけして真黒だ。よくまあ、あんなに黒くなったものだと思うほど真黒です。漁師も顔まけするほどの黒さです。そんなわけで、私たちの仲間では、誰も桂君をTR工業の社長だなんて思っていません。漁師だと思っている。漁の方をやめて、会社の仕事に専心するというのであれば、これはわれわれ釣り仲間にとっては大事件ですが、そうではなくて、会社の方を辞めて、釣りに専心するというのですから、極めて自然なことであり、当然なことであり、その出所進退たるや頗るわが意を得たものであります。

――桂君が釣りに専心すると聞いて、二、三人ひどく悦んでいるのがいる。こういう席で披露していいか、どうか知りませんが、われわれの仲間には知れ渡っていることですから、桂君を肴にする意味で公表することにいたします。伊豆の突端部に近い小さな漁村にわれわれの泊る余りきれいでない旅籠屋がありますが、そこの内儀さんと、娘さんと、そこの女中の三人が、桂君に惚れている。謂ってみれば、家を挙げて惚れていることになります。内儀さんに訊いてみると、あれだけきっぷのいい男は当今余りない。ずいぶん我儘だが、我儘を言われても少しも腹が立たない。何となく胸がきやきやして変な気持になるから不思議だと言います。娘さんの方は、これは二十二、三のなかなかの美人でありますが、桂君の古代ギリシャ的風貌に参っている。われわれが桂君の年齢をばらしても、年とっているとか、若いとかいうことは一切感じないというから、困りものであります。女中の方は三十ばかりの出戻りですが、あんな親切ないい人はいないと言う。どうも、いつか桂君に手を握られたことがあるらしく、桂君の手もいいと言います。手のどういうところがいいかと訊いてみると、すべす

べしていて独特の冷たさを持っていると言います。あの真黒い魚臭い手がいいと言うんだから、女心というものは理解の外であります。

会場の到るところから笑い声が起った。大乃木太平の小柄な体は見えなかったが、その声はどこからともなく、天井の方から参会者の頭上へと降っていた。

大乃木の少し調子に乗って喋りまくったスピーチが終ると、会場は再びもとの騒がしさにかえった。大乃木に代って、誰かが喋ったが、この方は誰も聞いていなかった。それまで多少よそ行きの顔をして神妙にしていた女給たちも、会場の騒がしさにほっとした面持ちになって、水を得た魚のような自由さを取り戻した。水で割ったウィスキーのコップを馴染みの連中のところへ運んでは、あとは自分たちもその輪の中にはいってきゃあきゃあ言っている。

会場の窓からは暗い都会の空が覗かれた。明るいうちに始まった会であったが、いつか窓外はすっかり夜になっている。黒い夜空は絨毯のように厚ぼったい感じで、よく見ると、そこに幾つかの弱い光の星が鏤められてあった。人いきれでむんむんしている会場は、窓際だけが少しらくだった。

大乃木太平のあと、二、三人の者が短く喋ったが、そのうちに誰も名を知らない老人が指名された。風采の上がらぬ小柄な老人で、声も低かった。紹介者の説明によると、何とかいう古本屋の主人だということだったが、凡そそうした商売の人間には見えなかった。田舎の役場の書記でも一生やって来た老人のような素朴さを身に着けている。その老人の声は、マイクを通しても、その周囲の者にしか聞えなかった。

――桂先生がまだ学生のお若い頃から御昵懇に願っている者でございます。その頃私は本郷で小さな古本屋をしておりましたが、ある時持っている書物全部を売るから下宿に取りに来いという学生さんがあり、行ってみますと、その学生さんが桂先生でありました。どうして大学をおやめになるかとお訊ねしてみますと、たいして理由はないが、ふいに親の脛をかじって、いい気になっている学生生活が厭になった。学校をやめて、これから何か生きていることを感じるような仕事をするつもりだとおっしゃいます。その時、私はこの学生さんが大学をおやめになったら、親御さんがさぞ嘆かれることだろうと思いまして、ばかなことを考えてはいけない。折角大学へはいったのだから、騙されたと思って、卒業だけはなさいと、極力おとめしたのであります。そしてやっとのことで桂先生に決心を翻えさせることができたのであります。それが御縁となり、今日までお付き合いしております。四十年程前のことであります。

その四十年のうちに、桂先生はすっかりお豪くなりましたが、私は依然として、今日もその頃と同じような古本屋をしております。桂先生がこんど社会の一線からお引きになると聞きました時、私は四十年前と同じように、おとめしたかった。世の中のことは厭なこと、つまらぬこと、腹立たしいことばかりでございます。人間というものはそれを我慢して生きて行かねばなりません。しかし、小さな古本屋の親父が、桂先生にまさかそんなことを申し上げられません。

素朴な老人は、この時、ハンカチを眼に当てた。人眼を感じていないような落着いたその仕種が、彼を見守っていた少数の人の心を打った。

——私は桂先生のお人柄が好きであります。曲ったことはお嫌いであり、その点は他人にも御自分にも極めて厳しい態度をお持ちになりますが、私などには大変温かい思いやりのあるお気持でお付き合い下さいます。長年お付き合いしていて、こんなに優しい温かい方はないと思います。先生は一年に一回か二回、ひょっこり店へお顔をお出しになることがあります。その後どうしているだろう、立寄ってみてやろう。そういうお気持でお寄り下さるのだろうと思います。桂先生がお見えになると、本当に生きていてよかったという気持になります。いつも先生がお帰りになってから、私と家内はそういうことを話し合います。

老人の話には、桂正伸に対する尊敬と愛情が誰にもそれと感じられる形で籠められてあった。実際に、桂正伸には、そうした一面があるであろうと思われた。釣り仲間の泊る旅籠屋の女中の手ぐらい握ることもあろうが、旧知を大切にする律義さもまた彼の物である。

——私は古本屋をやっておりますが、かねがね古本を売買するだけでなく、一度だけ書物を出版してみたいと思っております。それは他ならぬ桂先生の魚拓集であります。先生がお釣りになった魚の拓本を作り、それを一冊にして上梓したいのであります。幸い数年前に桂先生のお許しも得ておりますので、いつでも出版にかかれる準備はできておるわけでありますが、肝心の魚拓を戴くことができません。先生も魚拓集をお出しになるお気持はおありなんですが、気に入った顔の魚になかなかぶつからないとおっしゃってでございます。私などにはどの魚も同じような顔に見えるのでございますが、先生のお目には、貧しかったり、神経質だったり、高慢ちきだったりして、なかなかおめがねにかなったのは少いらしゅうございます。しかし、いずれにしましても、将来先生の魚拓集が私の手で出版される日は来ると思います。その節は皆さまに先生がお好きな魚の顔をお目にかけることができると存じます。

老人は丁寧に頭を下げると、マイクの前から離れた。小柄な体はすぐ人混みの中に消えた。老人のスピーチを耳に入れた者たちは、世の中には変なものを出版したがる人間も居るものだという思いを深くした。

司会者は次に、この会の主賓である桂正伸の挨拶を求めた。そして、桂正伸がこれから挨拶するということを、二回にわたって会場へ伝えた。さすがに会場はざわめきをしずめた。

先刻鬼原が言ったように、桂正伸はなるほど色が黒かった。六十歳に近いということだが、老人じみたところはどこもなかった。金火箸みたいだと新聞の人物批評の欄で書かれたことがあったが、長身で、痩せ型で、顔は陽灼けして真黒なのだから、さしずめ金火箸とでも言うほかはあるまい。上着の胸のポケットから白いハンカチを覗かせたまま、桂正伸はマイクを前にしてまっ直ぐに立っていた。その顔は平生より少し生真面目だった。桂正伸はやがて口を開いた。

——今晩はほんとうに有難うございました。二、三人の親しい連中から、お前はふだん魚ばかり釣っているが、その罪亡しに一回だけ肴になれと言われました。これまで余り友達の頼みを諾いたことはないのでありますが、丁度従来の職場から離れた時でもあり、その御挨拶もしなければならぬと思っていた矢先でもありますので、いっそ肴になってしまえば事は簡単だと、ずぼらな考えを起しまして、肴の役をお引受けすることにした次第であります。

桂正伸はここでちょっと言葉を切った。これまでテーブルスピーチが商売のような毎日を送っていたので、喋り方は慣れていた。

——肴の役を引き受けてみまして、肴になるのもまたいいものだと思いました。こんないい役があることを知っておれば、今までにも自分から進んで、この役を買って出ただろうと思います。友達も、先輩も、後輩も、今日までに今夜ほどこんなに優しかったことはありません。みんな私を労って下さるし、ねぎらって下さるし、褒めて下さる。悪いところは眼を瞑り、いいところだけを捜して下さる。今晩はその意味で、私として大変満足であります。鬼原君が言いましたように、これまで公私両方の生活に於て、我儘を押し通して来ました。にも拘らず、このような楽しい会を持ち得ましたことは、まことに果報だと思います。

——従来の職場から身を引きましたことには、別段深い理由も、そうしなければならぬ原因もありません。もうそろそろ忙しい仕事は若い人たちに代って貰って、少しのんびりして余生を送りたいと考えたのであります。どこの会社にも定年というものがあります。その定年の年を、私は

既に三年程前に迎えております。社を引いてもいっこうおかしくない年齢になっております。先程大乃木君がおだてくれましたが、残念ながら、もう宿屋の娘さんや女中さんも、まともには相手にしてくれません。大体、大乃木君などに喋るということがおかしい。恋している女性というものは心の中の大切なものを、なかなか人には話さないものですし、取り分け大乃木君などには用心して喋る筈がありません。

低い笑声が会場のあちこちで起った。

――まあ、いずれにいたしましても、そのような年齢になりましたので、あとは仕事のことは一切考えず、魚でも専心釣ろうというわけであります。魚を釣ると言いますが、魚を釣るにもやはり年齢というものがあって、リュウマチでも出れば、それでおしまい、そういつまで釣れるというものでもありません。この間友達の一人から、こんどお前は何をやろうと考えているんだと訊かれましたが、現在のところそういう気は全くありませんし、将来も恐らく絶対にないであろうと思います。他の事業に転身するくらいなら、何も自分がそこに育ったTR工業を辞めたりはしません。のんびりと釣りでもして過したいだけの気持で、もし何かすることがあるとすれば、先程お話の出た魚拓を作ることぐらいであります。

桂正伸はそれから最後を型通りの言葉で結んで挨拶をおわると、少しずつ体の向きを変えて、会場の三方へ軽く頭を下げてから、マイクの傍を離れた。そしてマイクから一番近いところにある卓へ戻ると、すぐその卓の端(はし)に置いてあったウィスキーの中に氷の欠片(かけら)のはいっているグラスを取り上げた。グラスを手にした時、彼の挨拶のために起った他の人の場合より少し長く続いた拍手はおわった。

司会者が"これまで喋る者は喋り、挨拶する者は挨拶してしまったが、あとはゆっくり飲み、且(かつ)歓談して貰いたい、桂正伸を肴にするのはこれからだから、どうぞ存分にこの会の主旨を生かして貰いたい"というようなことを喋った。

桂正伸はいつもより多少愛想よく見えた。誰にも笑顔を向け、遠くの方から自分に近寄って来る者のあるのに気付くと、自分の方からもその方へ歩み寄って行った。そして、親近の度合に依って、「やあ」とか「よお」とかいう最初の言葉を使い分け、

「どうも有難う」

とか、

「きょうはすみませんでした」

とか言った。大抵それ以外には余分なことは言わなかった。挨拶する相手が大勢なので、それ以上のことを言っているゆとりはないわけだったが、しかし、桂正伸は平生で

も大体そういう態度だった。必要なら幾らでも喋ったが、よほど親しい連中以外は無駄口はたたかなかった。従って無口というのではなく、口が重いという方が当っていた。尤も、TR工業を今日の大きさに育てるまで、ずっと社長の地位にあったので、人に命じるばかりで、命じられることのない立場が、彼に他のいろいろの桂らしいとか、正伸らしいとか言われるものと一緒に、それを第二の天性として彼に賦与していたかも知れない。確かに社長らしい我儘さも、社長らしい得手勝手さも、社長らしい下情に通じなさもあった。口の重いのも社長らしい口の重さであった。

桂正伸は幾つかの渦へ、次々に顔を覗かせた。自分のために集ってくれた連中に、やあとか、よおとか言いながら笑顔を向けるためであった。渦から渦へと移って行く途中、夜の蝶たちと体をぶつけると、桂は黙って機械的にその肩を軽く叩いた。大抵顔見知りの女給たちであったが、それが彼の女給たちへの、今夜は御苦労さんだなという挨拶であった。女たちには、いつものことだが、そうした桂が、取りつく島のない気難しい人間にも、また反対にひどく優しいところが匿されてありそうな人物にも思えた。

会場に詰めかけていた参会者は、いつとはなしに少しずつ減って行った。背広服が少くなると、女たちの姿が目立って来た。桂正伸は鬼原から肩を叩かれた。

「遠藤と辰口と三人で氷川で待っているぞ」

鬼原は言ってから、

「それとも新橋に席を作ろうか」

「いや、氷川の方がいい」

桂正伸は言った。親しい仲間だけで二次会をやるつもりらしく、その打合せだったが、桂は氷川という食べること専門の小さい店を選んだ。ウィスキー以外何も口に入れていないので、氷川へ行って、落着いて、鱸のあらいでも食べたかった。勿論若い女たちに侍られるのも悪くはなかったが、何となく蒸し暑い感じだったし、それに自分のパーティの開かれた今夜はそういう気持になっていなかった。親しい連中だけで食べながら遠慮のない言葉を交したかった。

「一人連れて行くよ」

桂正伸は言った。

「どうぞ、一人でも二人でも」

鬼原は、桂が酒場の女の子でも連れて行くと思ったらしかったが、桂の連れて行くと言った相手は違っていた。先刻から多少場違いの感じで、食べも飲みもしないで、会場の隅に置かれてある椅子の一つに腰かけている古本屋の親

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com